

MADE BY CHIYODA NOTE CO., LTD.

FINER WRITING FEATURES ON THE BEST SUPERIOR FOOLSCAP

57

敬学会賞第十八回入選作品

薬草の研究

六年四組

鈴木裕子

夏目B40327

せくじ

- 1 動機.....2
- 2 わたしの採った薬草.....4
- 3 民間薬とは?
- 4 漢方薬とは?.....9
- 5 漢方薬と民間薬のちがい.....10
- 6 漢方薬は古くて新しい.....11
- 7 やすい薬.....12
- 8 漢方薬とビタミン.....15
- 9 漢方薬のせんじち.....16
- 10 研究の順序.....18
- 11 反省.....20
- 12 お世話になった方々.....21

1. 動機

わたしは、去年の夏 お兄さん達と一緒、山寺に行きました。そして、石をきざされた、
『しずかかきや 岩にしみいるせみの声』と、いう句が遠い昔、芭しゅうと言う人の句だ、けい句である事を聞きました。
芭しゅうは、山寺をみてから大石田に行き、そこからサバネ山を通って、本合海に出て、舟で最上川を下り、酒田に行ったのだそうです。その時の句は、
『五月雨を あつめてはやし 最上川』と、いうのと お兄さんにお話を聞きました。
本合海は、わたしのおばあさんの生れた所で、最上川つほとりにある、美しい山にかてましたしずか村です。
江戸時代は、ここから舟で 庄内に通う、大事な交通の要地で、大変にぎわったことで、そのころのいろいろな面白い話を、お母さんに聞きました。
わたしは、六年の夏休みの研究は、芭しゅうが通った、奥の細道をわたしと、歩いてみたり、舟にのって最上川を、遠い江戸時代は、芭しゅうが感じたものの、わたしは、昭和三十九年のわたしの目からみて、感じたものを絵にかいたり、詩にしたりして、みたいと思っています。
そのため、芭しゅうの本をよんだり、芭しゅうのお話をきいたりして、夏休みの研究の準備をしてきました。
ところが、六月の始めお母さんが急に、

病気でたおれ、すぐ直ると思っていながら、
なかなかよくなりません。
とうとう夏休みに入ってしまった。
お母さんの病気は、全身リュウマチと言った
やうで、体の方は良くなったのに、目がまっか
じゅう血して、なかなかよくなりません。
内科の先生と、眼の先生と、両方の先生に、
みてもらっているのですが、目が悪くなったので、
お薬をのむと、体の方が悪くなり、
お薬をやめると、又目が悪くなってしまうのです。
そのうち夏休みが来てしまいました。
お母さんの病気は、まだ悪く、わたしは、
奥の細道どころではなくなっていました。
早くお母さんによくなってもらいたいと思ひました。
先生は、「リュウマチは因った病気で、なおす
さめてかないのです。お薬は、一時病気を
おさえるだけで、長く飲むと、副作用があるので、
あまりたくさんのはせら薬と云かない」のど
おっしゃいました。
お父さんは必っはり副作用のない、かん方薬を、
気長にのむより仕方がないだろうと、
それから毎日、どびんで、お薬をせいで、
お母さんへのせしました。
それは、草の根であつたり、木の皮であつたりして、
わたしをおどろかせました。
昔の人達は、こうした山や野の草や木等で、
病気をなおしてきたのでしようか。
わたしは、たんだい面白くなって、いろいろな薬草の
研究、してみたいなりました。

2. わたしの採った薬草

1	あじさい	16	おみなえし
2	あさがお	17	おきなづさ
3	あざみ	18	からすびしやく
4	あし	19	かきどうし
5	あんず	20	かさどち
6	いたどり	21	かのてそう
7	いぬさんしょう	22	かたばみ
8	いのすぢ	23	からすうり
9	いちじく	24	かわらぶとぎ
10	いぼた	25	かかいさ
11	うつぼくさ	26	ききょう
12	うこぎ	27	ぎしぎし
13	おおばこ	28	くて
14	おとぎりそう	29	くす
15	おさと		

30. いちぢし
31. くわ
32. くらみ
33. くらすき"から
34. けんのしょうて
35. ざいろ
36. さんほう
37. しおん
38. しやいなけ"
39. しょうかい
40. しょうぶ
41. しらい
42. やまぐみ
43. せきしょう
44. たらわ
45. かんはな

46. つるとくぢみ
47. どくぢみ
48. せんぶり
49. とくさ
50. とりかふい
51. さわなとり
52. むでして
53. おおれん
54. なんとん
55. ねこやなき"
56. ねむのき
57. のいはら
58. はてで
59. はつか
60. はとむき
61. ははこび

62. はうずき
63. みちやなき"
64. はますけ"
65. とも
66. くら
67. すいせん
68. きく
69. やぶらん
70. やまに"ばう
71. やまのいど
72. ゆきのした
73. よとぎ"
74. りんどう
75. かき
76. おけな
77. うきやから

78. きんみずけき
79. さくら
80. しそ
81. かけ
82. やつて

採集地

小白川、山太附近、川原、妙見地
関沢、城北、その他。

私が採集したおたのに
出来なかつた薬草。

- 1 ききょう、りんどう、きざまから採る予定であつたが、行けなかつた。
- 2 つりがねにんじん (ツリガネ草)
- 3 すいかづ (りんどう) (山地)
- 4 にわとこ (山地)
- 5 そくす (クサニワトコ) (山地)
- 6 あかね (山野)
- 7 さささげ (山地)
- 8 いぬほうずき (野原)
- 9 はしりどろろ (山地)
- 10 むるがお (野原)
- 11 ていかかすう (野原)

3. 民間薬とは？

遠い、遠い昔の人達が、病気になる時、
大抵からおそろふとシテ、それこそ自然に、
自分を守るために気付いたアイデアから、
出発してつていふ。
日本神話に、大國主命が皮をむかれて、
あかぬけに成つていた白うさぎ、
かまのぼで包むるやうに教えて、
治してやうと話がありました。
あつたかまのぼは、(かん方薬ではおう、又は、
は灰という薬だやうです。)うして親から子へ、
子から子へといふと、言い伝えられて来たのか、
民間薬です。
それはみな、私達の身近にある植物や
動物で、時には私達らの食物としてゐるので、
あり、とにかく、たやすく手に入りやすいものが
多いつてゐる。
私がとつた薬草と、大葉うらや小川つれきや、
小白川のうら通りつ道のわき、川原や妙見寺の山、
坊原、関沢と、大抵でどかかんさんに行ける
所から、とりました。
また、民間薬の作用をしらべてみると、
はげしい作用のあるものは、使われていません。
ですから、量がすちかつて、病気がちがつていて、
き陰のちいどろろが使われています。
それに、毒があるものは、「これには、毒がある」と
いふやうにし、き陰がおきないように防いで
います。
その後の時代になると、医者や薬屋ができて、
お金のことや地えきの関係から、
医者にかかれる人や、薬を買えない人たちが、

10 むらかお (野原)

11 ていかかず (野原)

12 みつかしわ (沼地)

13 えごの木 (ロクロノ木) (林)

14 くけとと (山地)

15 はなりの木 (クシャミの木) (山地)

16 いちやく草 (山地の木の下)

17 あくせつじん (山林の木の下)

18 つばき (山林の木の下)

19 まきたが (深山に多い)

20 るるで (フシの木) (山地)

21 にかき (山地)

22 きわだ (深山)

23 さいおら (山地)

24 われどこう (山地)

25 くさぼけ (シトミ) (山地)

26 ぐいどんいそう (岩ぶき) (水分の多い岩のある所)

27 くさのおう (石がき、道のわき)

28 こぶし (山地)

- 29 いかりそう (木の下や野原)
- 30 めぎ (コトリトマラス) (山野)
- 31 かわはね (コウホネ) (木の浅い流石)
- 32 おくのやから (ぬすびとの足) (山地)
- 33 つちあけひ (深山の木の下)
- 34 さいはいうん (山林の木の下)
- 35 きつねのかみそり (野原、つつみ、木の下)
- 36 ひがえはな (山ふところの北側)
- 37 あまな (野やつつみの、陽あたり)
- 38 さるとりいはう (山地)
- 39 あまどいろ (野原)
- 40 すずらん (高原)
- 41 ふじはかき (野原)

民間薬で、病気が自分を守ってきたのです。
そして少しづつ発展し、また改良されて、
次々と伝わってきたのです。

4. かん方薬とは？

かんほう薬の勉強は、約二千年前から始まって、
そのころあらわれた、たくさんのお本が、
今とそっくり、りっぱなものになっているそうです。
それは民間薬に出てきた、たくさんのお薬草の
何種類かがあわさって、一つの治りよう薬となっ
ています。

その治りよう薬を書いた本が、昔から今まで、
ずっと変わらなく伝わってきているのです。

これを、かん方の「原典」とよんでいます。

かん方の医者か病人をみて、病気をみつけ、

原典にしたがって作る治りよう薬か、

かん方薬というのをさうです。

漢方の初めは、五千年ほど前にお百しょうさんが

百草をみわけて薬になるものを、えりわけて

いまだきった時から、できたものをと

言われています。

漢方薬として使われているものは、

和漢からつくられている食品であったり、

お茶、お酢のようないくつか品であったり、

しょうが、カラシ等の調味料であったりして、

みな身近なところにある品物です。
そのころは、お茶や麦などを、主食としては、
食べていなかったのでしょうか。
米や麦などと漢方薬の中に入れてはす。

5. 漢方薬と民間薬のちがい

	漢方薬	民間薬
くみだて	何種類かが合わされて できている。	かんみである。
はほう	あ る。	な い。
おこり	医 書。	民間薬書。
薬草	地下部が多い。	地上部が多い。
病 気	いろいろ重なったもの。	病気が一つである。
用 法	長い間の経験と 理論がある。	経験だけを 理論がない。
しつは いけなさと	明らかにしている。	明らかでない。
こうか	かきられているか 正確で特し。	一般的であるか 確かとはいえない。
用いかた	医者のおしんがつか いる。	成分の研究や 製剤化するとは便利

6. 漢方薬は古い新しい

二千年前から、私たちの祖先の健康を守り、病気をなおしてきた漢方薬は、明治初年に西洋医学が入ってきてから、だんだんとおきざられ、忘れられていきました。

日本人は、新しいと言う事と、外国製だと言う事を、とても信用するやせを持って、いるので、東洋の古くから伝わる漢方薬には、みむさとしなくなっていきました。

ところが、ドイツからオイソールという新しい薬が出て、それが、日本のトウキから採ったものであることがわかり、それから日本の製薬会社は、改めて薬草の研究を始めた。

私たちが今のもでいる、いろいろの薬は、漢方薬配合とかいて、日本の薬草が使われるようになり、ました。

漢方薬は、決して古いものではなく、最も新しいものであり、新しいものは、新しく出来たものではないといえます。

ちかごろは、化学的に人工で作り出している薬も多いですが、中にはまだ、薬草から取り出している薬と、たくさんあります。

原料の草根木皮が美しいふうやうをして、かたかなの名前をつけると、みな新しい薬になってしまいます。

薬草は、製薬会社にかいとりれる量は、年間には、大なるので、その中で輸入しているものと、たくさんあります。

これから、まだ、まだ、発足されていない成分を、薬草から発足していく事でしょう。

7. ますい薬

1) 漢方薬には、ますいはありません。たとえあったとしても、現在のすすい薬やすすい学からみると、とるにたりないことでしょう。しかしわれわれ日本人として、わすれられない、そして世界には、有名な話があります。それは世紀の大手術士とされた、華岡青州先生のお話です。先生は和歌山県ぬか郡平山村に生れました。



お父さんと医者でしたので、先生はお父さんの教育をうけ
 ましたか、草深い片田舎で、良き師友もなく、
 一生を終る事を残念に思い、京都に遊学して
 オランダ流外科と、漢方薬を学ば、広くいろいろな人と
 交わり、民間に伝わる薬草の研究をしました。
 そして、まずい草の研究を重ね、薬草からなる
 全身すいを完成させたのです。
 そして先生は、いっしょに大手術に成功したのです。
 その手術は現代のエーテルすい、クロルホルムすいより
 四十年と早かったそうです。
 先生がその時使ったものは『麻酔散』といってその主成分は
 ちようせんおさがおとうすいなどです。
 先生は、自分で紀州の山野を歩き、採集しては
 薬効をたしかめました。
 その動物実験の役を助けたのは、先生のおくさんでした。
 おくさんは先生の仕事のため、いろいろの毒草をせんじて
 ためしにのみましたので、ついには両眼を失ってしまいました。
 アメリカのシカゴにある栄養館には、『外科を通じて
 人類にこうけんした世界の医学者』が祭られています。
 その一人に先生が選ばれています。
 そこにはいっぱい日本画があり、実験台になっている
 青い顔色のおくさん、それを感動の目で見守る
 先生と、そのお母さんの姿が見事に描かれています。



ちようせんおさがお

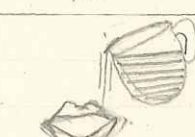
ウス"(トリカブト)

別名 {ウス フシ
 名 {デシスウ

8. 漢方薬とビタミン

漢方薬とビタミンは入っています。
 天然自然の産物ですから、薬草にふくまれた
 ビタミンは、はかいされることなく、体にきゅう収されます。
 しかし、漢方薬をせんじるときは、熱に弱いビタミンは
 熱によって変化します。
 それで散薬や丸薬にして飲む方法とあります。
 これなどは何の変化もない、ビタミンを自然に
 きゅう収します。
 たとえば、漢方用薬の当帰には、ビタミンB₁₂が
 多量にふくまれ、武田製薬の渡辺武博士によって、
 発見されています。
 ミネラルは、薬草がミネラルをふくんだ自然の土の中から、
 ミネラルの豊富な水をきゅう収して、成育したものであるから
 どちらにせよ、ミネラルをふくんでいます。

9. 漢方薬のせんじ方

漢方薬のせんじ方・飲み方		
1		1袋(1日分)を
2		とびん又はアルマイトを 茶びんに入れ
3		水三合(コーヒー茶わん三はい) を入れ
4		とろ火にかけて、半量(1合半) にせんじつめ
5		茶わん1はい(二回分) をとって
6		残りを飲みます。(午前十時) (食前1時間か食後2時間か空腹時に)
7		茶びんのせんじカスを送って 1度水洗して⑤のせんじりを入れて ちいて
8		次に飲むときに、少し温めて 茶わん半分ずつ飲みます。 (午後三時としゅうしん時)

9. の説明

1. 1日分を、エビン又はアルマイトの茶びんに入れます
2. 水とコーヒー茶わんに三倍入れます
3. 薬をなじませるために、はいてかるくかきまぜて20〜30分おいておきます。
4. エビンを土鍋火にかけます。炭火でなくとも、れんたんでよい。電熱気でよいから、なるべく小さい火でネトネト煮ること。
5. ふたをとっておく事。(にこぼれないため)
6. 大体30〜40分で水の量が半分になります。これで出来上りです。
7. この薬を、またコーヒー茶わんに1/2に1/2に入れて、残りのコーヒー茶わんに半分きり残りません。その半分を1回目に飲みます。
8. 茶びんに残ったかすを、きれいにすてて洗います。
9. 水あらいした茶びんに、はいるのコーヒー茶わんに1/2を入り入れ、おたためて2回目と3回目のみます。
10. 夏は、冷暗所に入れておくこと。

10. 研究の順序

- 8月10日 薬草の研究をしようと思った。
- 8月15日 お父さんの古い薬草の本をよみだした。
- 8月16日 お兄さんと妙見寺ふ近を歩いて薬草うしいものを採ってきた。
- 8月17日〜 新聞紙に入れて、重しをかけ、毎日とりかえた。
- 8月29日〜 毎日出たところから、図画紙に、はっていったが名前が全然わからない。
- 9月10日〜9月14日 学校の図書館から薬草の本をかりて調べたが、外国のはかり多くて、わたしの採った薬草はでていなかった。
- 9月12日 山形製薬のおいさんが薬草の本を持ってきてかしていただいた。
- 9月14日 わたしは本をみて、これに書いてある薬草をさがした方が速いと思ひ。

その名前の薬草を集める事にした。

9月21日

川原にいき、小白川の佐藤さんをたずねて
お庭の薬草をたくさんいただいた。

9月21日

みばりが丘アパートの近所、山犬の川のそば等、
歩いてさがした。

9月23日

私の研究をみて、親切にいろいろの
薬草を持ってきてくださった方が、やってきた。

9月27日～10月9日

私の薬草は、1枚ずつふえていったが、
名前のわからないものがかなりあった。

10月10日

花屋さんにいって、とりかぶとをみつけた。

10月17日

鈴木先生にみていただく。

10月19日

和合先生にわからない薬草の名前をみていただく。

10月22日

あいさい、しそ、たけ、さくら、やつで、すいせん、
等を出した。

11

反省

1. 私は、奥の細道の研究をしようと思って、
いたのに、研究のはいおきたかおそく、
春から初夏にかけての植物の採集が、
できなかった。

2. 植物の名前がわからなくて、とたまたした。

3. お手つだいしていただいた、たくさんの方
人たちに感謝はしていますが、
自分一人で集められたら、
もっと楽しかったらうにと思い、
努力が足りなかったと反省します。

4. わたしの使った参考書

『原色野外薬用植物図説』

薬剤師 長尾重延 著

『漢方薬と民間薬』

医学博士 西山英雄 著

『民間治療法全集』
平田藏吉 著

12. お世話になった方々

1. えびな八郎先生
2. 鈴木先生
3. 和合先生
4. 図書館のおねえさん
5. わたしのおいさん(山形製薬会社の人)
6. 庄栄さん(お兄さんの友だち)
7. あら井さん(山形エーザイ薬品の社員さん)
8. 原さんのおばさん(お母さんの友だち)
9. 佐藤さんのおばさん(親類のおばさん)
10. 花屋のおいさん
11. かけおちゃん(私のいとこ)
12. 父と母と兄

● そんなにたくさんの方たちの親切によって
研究が完成したことを深く感謝します。